

研 究 分 野	資源生態	部 名	漁業開発部
研 究 課 題 名	うすめばるトータルプラン推進事業		
予 算 区 分	県単		
試験研究実施年度・研究期間	H. 1 8 ～ H. 1 9		
担 当	山中 崇裕		
協 力 ・ 分 担 関 係	青森市水産指導センター、脇野沢村漁協		

〈目的〉

陸奥湾内に着底したウスメバル稚魚の生態を把握することにより、漁獲対象資源であるウスメバルにはたす陸奥湾の役割を解明し、今後のウスメバル資源の保護及び増大についての知見を得ることを目的とする。

〈試験研究方法〉

2005 年春に青森市沖合で採取したウスメバル稚魚を増養殖研究所、脇野沢で中間育成し、標識を装着し、2006 年 6 月 27 日に脇野沢村沖人工礁周辺（水深約 50m）で船上から放流した（表 1）。

また、2006 年 9 月 11～12 日及び 10 月 12～13 日に、湾口部や脇野沢沖人工礁設置海域、佐井沖ウスメバル増殖礁設置海域において計量魚群探知機（以下計量魚探）調査を実施した。計量魚探調査は試験船青鵬丸搭載の EK500（シムラッド社）を使用して EP500（シムラッド社）でデータを収録した。データは MO で持ち帰り、エコービュー（ソナーデータ社）で解析した。調査時の航走速度は概ね 7 ノット前後とし、湾口部（9 月 12 日実施）では 4 本、佐井沖（10 月 13 日実施）では 8 本、脇野沢沖（9 月 11 日、10 月 12 日実施）では 4 本の調査線を設定しデータを収集した（図 1）。

〈結果の概要・要約〉

2000 年からの標識放流魚の再捕結果を図 2 に示した。現在までに再捕されたのは、2000 年放流では、青森ブイ放流群 5 尾、奥内放流群 7 尾、脇野沢放流群 2 尾の合計 14 尾、2001 年放流では、青森ブイ放流群 4 尾、指導センター放流群 8 尾の合計 12 尾、2002 年放流では、平舘ブイ放流群 6 尾、脇野沢放流群（中間）6 尾、脇野沢放流群（現場）3 尾の合計 15 尾であり、2003 年放流群は平舘ブイ放流群 1 尾、脇野沢放流群 3 尾の合計 4 尾であった。このうち 2006 年に報告されたのは、2002 年に脇野沢から放流され、今別町沖合で再捕された 1 尾のみであった。放流後の経過日数が最大であったのはこの採捕で、経過日数は 1,466 日であった。

計量魚探のエコグラムの一部を図 3 に示した。湾口部の調査では中央付近に魚類の反応が見られたが、魚礁域等では、まとまった反応は確認されなかった。

〈主要成果の具体的なデータ〉

表 1 標識放流結果

放流月日	平成18年6月27日
放流場所	脇野沢人工礁周辺
現場水深	約50m
放流方法	船上放流
放流尾数	107
平均TL	113mm
標識種類	スパゲッティク18mm
色	青
刻印	アオスイ281～アオスイ420

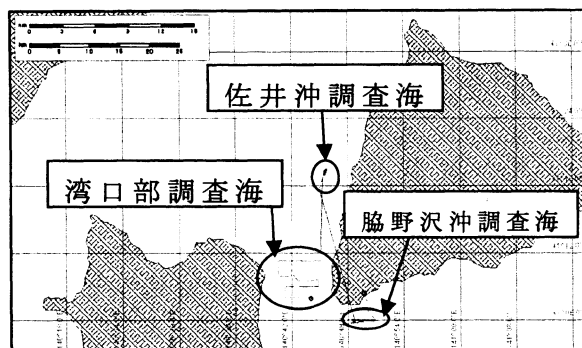


図 1 計量魚探調査海域

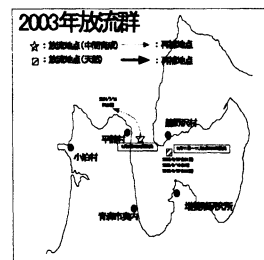
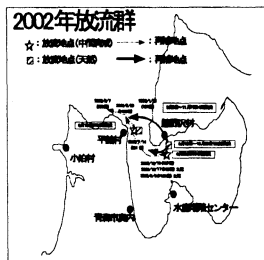
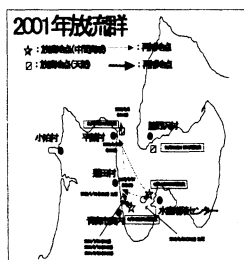
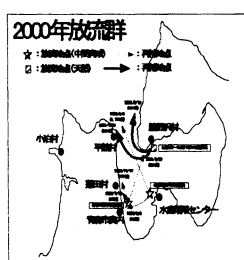


図 2 放流と再捕地点（放流後 20 日以内の再捕例を除く、2004 年以降放流群再捕報告なし）

* 図中の年月日は再捕年月日、() 内は再捕までの日数

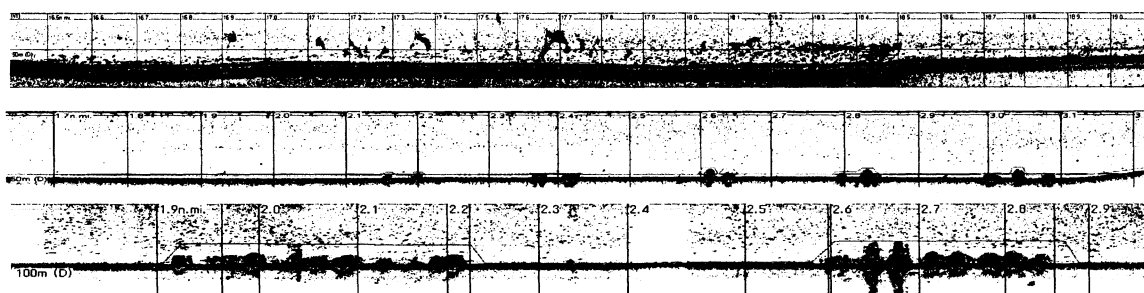


図 3 エコグラム抜粋（上段：9月12日湾口部、中段：10月12日脇野沢沖、下段：10月13日佐井沖）

〈今後の問題点〉

ウスメバルの定量化

〈次年度の具体的計画〉

標識放流は湾内ではなく今別沖、尻屋沖の2ヶ所を予定している。

〈結果の発表・活用状況等〉

特になし